

日本史A、日本史B

第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

日本史A

1 前 文

今年度の大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）は、現教育課程になって4年目の試験である。「日本史A」の受験者数は4,368人で、昨年度に比べて105人（約2.5%）増加した。センター試験全体の受験者数も3,234人（約0.6%）増加し、地理歴史科全体でも2,788人（約0.8%）増加したが、「日本史A」の受験者数の増加率はそれを大きく上回った。一方、今年度の「日本史A」本試験の平均点は46.51点で、昨年度より9.44点下降し、標準偏差は17.57と昨年度より1.19ポイント上昇した。この要因としては、受験者が比較的取り組みやすい政治史や外交史が中心であったにもかかわらず、正確な知識・理解を必要とする問題が数多く出題されたこと、年代順に配列する問題の選択肢が四つから六つに増えたこと、「日本史B」との共通問題の難易度が高かったことなどが考えられる。このため5年ぶりに平均点が50点を割り、「日本史A」本試験の平均点と「日本史B」本試験の平均点（57.94点）との較差も11.43点と、昨年度に比べて拡大した。受験者に不公平感を抱かせないために、次年度以降、平均点の科目間較差は「日本史B」との間だけに限らず、他の地理歴史科、公民科の科目とも広がらないように配慮を求めたい。これらを踏まえ、今後、基礎的学習の到達度を判定し、平均点60点を目安とするセンター試験の本旨・目標にそった出題が強く望まれるが、そのためにも、高等学校における授業時間や実態に合わせた適切な出題内容、難易度については更なる検討を行い、特に「日本史B」との共通問題においては平均点に与える影響が大きいため、問題作成において御配慮をお願いしたい。

以下、今年度の問題について(1)～(4)の視点で分析を行った。

- (1) 高等学校学習指導要領（標準2単位）に準拠し、教科書の内容や授業実態に即したレベル・範囲・内容の問題であったか。
- (2) 「日本史A」設置の趣旨を生かした「世界史的視野に立った理解」や「歴史的思考力」を評価する問題であったか。
- (3) 分野別バランスがとれていたか。
- (4) 出題方法や表現などが適切であったか。また、60分の試験問題としてふさわしかったか。

2 試験問題の形式・分量・範囲

- (1) 出題形式では（表1）、「古いものから（年代）順に配列」させる設問が、昨年度とほぼ同様の8題（24点）出され、点数にして5点分増加した。選択肢の数が増えて難化の要因ともなったが、この出題形式は歴史の流れを把握するという観点からも、今後も、大問につき1問程度の出題が望まれる。逆に今年度は、「正しい事項（人名・単語など）を選択」させる設問が1題も出されなかった。

- (2) 全体の分量は、大問6題、問題数34題で、昨年度より2題減少した。また、第4問と第5問の計12問（35点）が「日本史B」との共通問題であった。正解を導くのに複雑で時間のかかるような問題もなく、例年並みの適切な分量であった。

本試験の設問形式（表1）

（ ）内は配点

設問形式	平成21年度	平成20年度	平成19年度
正しい事項（人名・単語など）を選択	0題（0点）	1題（2点）	3題（7点）
誤った事項（人名・単語など）を選択	0題（0点）	0題（0点）	0題（0点）
二つ以上の事項（人名・単語など）の組合せ	7題（21点）	9題（24点）	8題（20点）
正しい文章を選択	8題（23点）	5題（14点）	5題（15点）
誤った文章を選択	5題（15点）	7題（20点）	7題（21点）
二つ以上の文章の正誤の組合せ	6題（17点）	7題（21点）	9題（26点）
古いものから（年代）順に配列	8題（24点）	7題（19点）	4題（11点）
	34題（100点）	36題（100点）	36題（100点）

- (3) 難易度については（表2）、昨年度の難易度指数2.86が今年度は3.09となり、難易度は上がったものと分析できる。設問ごとの難易度を昨年度と比較してみると、今年度は「易しい問題」及び「やや易しい問題」がそれぞれ3問ずつ減少し、「標準的な問題」が増加した。全体的には標準レベルからやや難しいレベルの出題が多くなった。

本試験の難易度（表2）

	問題番号	問題数	前年比
難しい問題	13、20	2	-1
やや難しい問題	9、14、16、17、18、21、25、31、32、33	10	+1
標準的な問題	2、5、6、10、11、12、19、22、23、24、27、28、29、30	14	+4
やや易しい問題	3、7、15、26、34	5	-3
易しい問題	1、4、8	3	-3
難易度指数（難しい順に5～1の指数を与え、平均値を算出）		3.09	+0.23

（委員の合議により、教科書で扱われているかという観点のほか、現場における授業の実態、受験者の実態を考慮し、問題ごとの難易度を5段階に分類した。以上の分析結果の集計が上の表である。）

- (4) 出題範囲を分野別に見ると（表3）、受験者が取り組みやすい「政治」の設問が13題（39点）と昨年度とほぼ同程度に多く、また、「外交」も7題（20点）から10題（29点）へと更に増加した。一方、受験者の苦手とする「社会・経済」が4題（12点）と昨年度並みで、「文化」は3題（9点）から1題（3点）と減少した。これは、数年来の「世界史的視野に立った理解」を問う問題を出してほしいという、私たちの要望が反映されたものであり、また、「文化」については、単純な知識を問うのではなく、「政治」や「社会・経済」と関連させて取り上げてほしいという昨年度の要望が取り入れられたものとして高く評価したい。時代別に見ると、昨年度少なかった「国際関係の推移と近代産業の成立」の項目からの出題が5題（15点）と増加し、全体的にバランス良く出題されており、昨年度と比べて改善されたものと考えられる。さらに、今年度も

史料・グラフ・地図・図版等を用いた出題が6題（17点）あり、様々な資料を提示して「歴史的思考力」を問う高等学校学習指導要領の趣旨を踏まえた設問を工夫している点は、大いに評価できる。今後もこのような出題を望みたい。

本試験の時代別・分野別出題傾向（表3）

②は2点問題、その他は3点問題である。

区 分		政 治	外 交	社 会 経 済	文 化	史料・グラフ・ 地図・図版等	問題数(配点)
歴史と生活	衣食住の変化						0題（0点）
	交通・通信の変化						0題（0点）
	現代に残る風習と民間信仰						0題（0点）
	産業技術の発達と生活						0題（0点）
	地域社会の変化	3 2	←			1 ②	3題（8点）
19世紀日本の形成と世界	国際環境の変化と幕藩体制の動揺						0題（0点）
	明治維新と近代国家の形成	6 27 28 11 17 9	← 5	14	7	4 8	11題（33点）
	国際関係の推移と近代産業の成立		12 13 29 31	←		10	5題（15点）
国際関係と近代日本の歩み	政党政治の展開と大衆文化の形成	15 16 30 32	19 ②		←	34	6題（17点）
	近代産業の発展と国民生活	↓		33	←	21	2題（6点）
	両大戦をめぐる国際情勢と日本	↓	←	20 22 23	→	18	4題（12点）
第二次世界大戦後の日本と世界	戦後政治の動向と国際社会	24	26	→ 25			3題（9点）
	経済の発展と国民生活						0題（0点）
	現代の日本と世界						0題（0点）
問題数（配点）		13題（39点）	10題（29点）	4題（12点）	1題（3点）	6題（17点）	34題（100点）
20年度		14題（40点）	7題（20点）	5題（13点）	3題（9点）	7題（18点）	36題（100点）
19年度		14題（41点）	2題（5点）	12題（32点）	4題（11点）	4題（11点）	36題（100点）

3 試験問題の内容・表現・程度

第1問 「日本史A」の主題学習である「地域社会の変化」をテーマとした問題

地域の文書館での体験学習を通じて文書館の役割と歴史資料の大切さを伝える内容であり、

身近な地域の歴史を調べ地域社会の変化を通して歴史的な見方や考え方を身に付けさせるように配慮されている。問1は写真の「召集令状」から解答は可能である。問2は全問を通じて唯一前近代を問うたものであるが、「士族の反乱」「国学」「応仁の乱」などのキーワードから解答は可能である。問3は旧国名と現在の県名を組み合わせたもの。第1問はいずれも主題学習のテーマにそったものであるが、全体に平易な問題で設問にもう一工夫欲しい。

第2問 幕末・明治期の政治・外交・文化をテーマとした問題

Aはペリー来航に関する2種類の史料を読み解く問題である。問1は歴史の知識はなくても史料と選択肢から解答できる。史料を読み解くことの意義は十分に理解できるがやや物足りない。問2は基礎的な知識があれば解ける標準的な問題。問3は年代順配列問題で選択肢が従来からの四つから六つに変化した。全体に難易度は上がったが、選択肢からの類推ではなく正確な理解を問うためには必要な措置だと考える。設問の難易度もこの程度であればよい。

Bは西洋近代文化の導入に関するリード文と図から読み解く問題である。問4は解答が容易なので、「鈴木三重吉」よりもっと明治期の音楽史にかかわる人物を選択肢にしてもよかった。問5は学制が実施されたころの状況と国家主義重視の教育の転換期を判別させる選択肢になっており設問のねらいはよい。ただし知識の裏付けがなくとも図から簡単に読み解くことができ、作問者のねらいが十分に生かされているとは言えない。問6は学制の実施について問う基礎的な問題であるが、学校教育とキリスト教との関係について直接結び付けて考えるのはやや難しい。

第3問 明治時代の外交をテーマとした問題

Aは明治政府と朝鮮・中国との外交関係について述べたリード文を読み解く問題である。問1は基礎的な知識を問う標準的な問題で、地図中の位置も分かりやすい。問2、問3も標準的な問題。

Bは明治政府とロシアとの外交関係及び北海道開拓史に関するリード文を読み解く問題である。問4はロシアとの外交史を年代順に並び替えるものであり難しい。特に国境を示す説明文から条約名を判断せねばならず難易度を高める要因となった。授業では教科書の内容に準拠して「樺太に持っていた権利をロシアに譲り、千島全島を領有する」と教えており、「占守島とカムチャッカ半島との間を国境とした。」という表記から条約名を推測させる問いは受験者になじまない。ここでは間接的に条約名を推測させるのではなく、問題文中に「樺太・千島交換条約」と直接条約名を出してほしい。ただし設問の内容は基礎的なものであり、例えば第3問の問1のように地図をそえて出題すれば、地理的な空間認識と歴史的な知識が結び付いた良問となったかもしれない。問5では「アイヌ」の近現代史が問われた。大切な問題ではあるが授業では十分に取り上げる時間がなく細かい内容まで問われると難しい。

第4問 近代の政治・社会をテーマとした、「日本史B」の第5問との共通問題

普通選挙制について述べたリード文を読み解く問題である。問1は基礎的な知識を問う問題で、解答は容易である。問2は重要事項であるが年代が接近していて選択が難しい。年代順配列問題の選択肢が増えて難化した典型だろう。また「日本初の社会主義政党」と「普通選挙」の結び付きになじみがなく受験者は戸惑ったのではないか。問3は「景山（福田）英子」や「伊藤野枝」の記載がない教科書もあり、「男女平等・女性の権利拡張」という観点で授業を

することは少ない。消去法で考えれば選択肢から解答は可能だが、それでは設問の趣旨が反映されないのではないかと懸念される。消去法ではなくしっかりと根拠で選ぶ問題を出题してほしい。問4のXの文は一文の中に「キリスト教」と「国家神道」と二つの軸が問われているため正誤問題の難易度を高めている。「人民戦線事件」もやや細かい。

第5問 近現代の政治・外交・社会をテーマとした、「日本史B」の第6問との共通問題

「幣原喜重郎」の生涯に関するリード文を読み解く問題である。特定の人物にスポットを当て歴史を考察する手法はなじみやすく、各時代とのつながりも明確でよい。Aは外交官時代の協調外交に関する内容を読み解く問題である。問1はシベリア出兵に関する標準的な問題。ただしYの文の「米価が下落し」の箇所を読み落としてしまうと、受験者は単純に「米騒動」だから正しいと判断する可能性がある。問2の「不戦条約」は教科書の扱いが小さく、また選択肢の年代も接近しているので判断するのが難しい。第4問の問2と同様、年代順配列問題が6択に増えて難化した典型である。

Bは幣原外交と挫折に関する内容を読み解く問題である。問3は小作争議に関する統計から正誤を読み解く問題である。「普通選挙法」の成立年代が分かれば解答は容易であるが、正確な年代を知っていることが正解に至る唯一の方法というのはいかかなものであろうか。問4は幣原外交の基本的知識が問われており標準的な問題である。問5は選択肢を6択にした趣旨が生かされており、歴史の流れを理解しているかを問う良問である。

Cは第二次世界大戦後の政治に関する内容を読み解く問題である。問6は民主化政策の基本的知識が問われており標準的な問題である。戦後史、特に社会・経済史は授業で十分に時間がかけられず、重要事項に触れる程度の場合が多い。問7のように「金融緊急勅令」の詳細な内容が問われると難しい。逆に問8は戦後の政治・外交史の基本的な知識であり受験者も十分に答えられるだろう。

第6問 近代の政治・社会をテーマとした問題

Aは大日本帝国憲法と初期議会に関するリード文を読み解く問題である。問1は標準的な問題であるが、初期議会の1892年に成立した内閣を選択するのは迷うところである。選択肢に工夫があるとよい。問2は標準的な問題。問3は条約交渉の推移を問う良問である。受験者の学習した成果が試されて励みになるだろう。年代を問う際には、このように時系列の推移や歴史的な背景を踏まえて出題されることを期待したい。

Bは大正政変に関するリード文を読み解く問題である。問4は標準的な問題であるが、「二つ以上の事項（人名・単語など）の組合せ」を問う場合には、選択肢が二つとも人名という組合せは単調な感が否めない。「二つ以上の事項（人名・単語など）の組合せ」を問う場合は、「人名」「歴史用語」など異なる要素の組合せであることが望ましい。問5は下線部と設問の関連性が低く、つながりが見えない。また、この問題も選択肢の年代が接近しており正しく配列することが難しい。問6は「軍部大臣現役武官制」の細かい内容が問われており、やや難しい。

Cは吉野作造の民本主義に関する史料と大正デモクラシー期の社会について読み解く問題である。問7は「国体明徴声明をうけて、美濃部達吉が天皇機関説を展開した」とあるが、「うけて」という表現が紛らわしい。問8は「民本主義」に関する標準的な問題。ただし知識さえ

あれば史料を読まなくとも選択肢の説明文のみで解答できる。史料問題は歴史の知識と結び付けながら史料を読み解かせる工夫が欲しい。

4 要 約

前文で述べた(1)～(4)の視点について意見・要望を記すことにする。

- (1) 今年度の「日本史A」は全体として標準2単位の科目の特性を踏まえ、出題の内容が基礎的・基本的な事項・事柄となるように配慮されていたと言える。ただし、前文で述べたように「日本史A」の平均点が50点を割り、「日本史B」との差が開いたことについては十分に言及せねばなるまい。第6問の間6のように詳細な内容まで問われていたり、第3問の間4のように授業実態とは異なる視点からの出題などがあり、こうした点が問題を難化させた要因となったのではないだろうか。次年度以降、教育現場での授業実態を踏まえた内容を考慮に入れ問題を作成してほしい。出題の範囲については1825年の異国船打払令から1997年のアイヌ文化振興法までの範囲であり適切であった。第1問の「歴史と生活」では前近代の内容が出題されたが、いずれも中学校で学習している基礎的事項であり適切な配慮がなされている。出題範囲に関しては次年度以降もこの方針を継続してほしい。
- (2) 「世界史的な視野に立った理解」という観点からは、「外交」の出題が昨年の7題から10題とさらに増加した点を評価したい。また第2問の史料1のように異文化に触れた庶民の様子を紹介したり、Bのリード文で西洋近代文化の導入についての記述があるなど、「外交」以外の視点が盛り込まれている箇所がいくつかあり出題方法に工夫が感じられる。「歴史的思考力」という観点からは、昨年並みの6題が出題され、史料・グラフ・地図・図版など多様な資料が取り上げられている点は評価できる。ただし素材をもとに思考力を問う問題は今年も少なかった。単なる図や史料の読み取りではなく、ある事象との関連性など歴史的な見方や考え方を問う作問をぜひともお願いしたい。更なる創意工夫に期待する。
- (3) 昨年度要望が出された「国際政治の推移と近代産業の成立」の項目からの出題が1題から5題に増加した。「国際環境の変化と幕藩体制の動揺」に関連する選択肢もあるので、本年度は時代別・分野別ともにバランスのとれた出題がなされたと言ってよい。次年度以降もこの方針にそった作問をお願いしたい。
- (4) 出題方法や表現に関しては、年代順配列問題で選択肢が従来の四つから六つに変化した。全体に難易度は上がったが、選択肢からの類推ではなく正確な理解を問うためには必要な措置だと考える。第5問の間3でも述べたが、正確な年代を知っていることが正解に至る唯一の方法というのはいかなるものだろうか。出題者は、これまで積み上げてきた歴史的思考力を育む取組を大切にして、教育現場に与える影響を十分に考慮しながら作問してほしい。また近年「正しい事項（人名・単語など）を選択」及び「誤った事項（人名・単語など）を選択」させる設問が出題されない傾向にあるが、こうした形式の出題も含めて難易度を下げる取組も必要であろう。「日本史A」と「日本史B」の受験者の相違も考慮しながら、「日本史B」との共通問題の有無も含めて、更なる検討を願いたい。問題数が昨年度より2題減少したことの影響は単年度の結果のみでは判断できないが、60分の試験問題として適切なものであったと考える。

日 本 史 B

1 前 文

平成 21 年度大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）における「日本史B」の平均点は 57.94 点で、昨年度と比較すると 6.33 点下降し、「日本史B」の試験としては、3 年ぶりに平均点が 60 点を下回った。

今年度は、昨年度の作問方針の継続を図りつつ、より完成度の高い問題作成が期待されていた。「日本史B」では、平成 2 年にセンター試験が始まって以来、平均点が 60 点を超えた翌年には、いずれも平均点が 50 点半ばとなった。しかし、一昨年度、昨年度と、初めて 2 年連続で平均点が 60 点を超え、こうした傾向に歯止めがかけられた。私たちは、これを「易化した」のではなく「標準的となった」として高く評価していた。これまでの「日本史B」では、他教科に比べ専門的で細かな知識が問われる傾向が強いと言わざるを得ず、問題難易度の適正化が懸案となっていた。それだけに、今年度の平均点が昨年度より 6.33 点も下降し、再び 50 点代に抑えられたことは大変残念であった。

これらのことを前提として、今年度のセンター試験問題の検討評価に当たっては、以下に示す 4 項目を中心に行った。

- (1) 高等学校学習指導要領に準拠し、教科書の内容や授業実態に即した出題であったか。
 - (2) 時代別・分野別の出題バランスは適切であったか。また、基礎・基本的な知識、総合的な思考力を評価するのにふさわしい出題であったか。
 - (3) 「細かな事象や高度な事項・事柄」に深入りすることなく、60 分の試験時間にふさわしい出題内容、難易度であったか。
 - (4) 設問形式、表現、図表や写真の扱いに配慮した適切な出題であったか。
- (注) 文中で具体的に問題を取り上げる際は、解答番号で表記した。

例 15 = 解答番号 15 の設問

2 内 容・範 囲

高等学校学習指導要領の要点に即して出題するとともに、今年度の試験では、受験者の理解力や歴史的思考力を問う姿勢が、一層鮮明になった。一方で、出題分野や内容の取扱いなどについて改善が必要と思われるべき点もある（「 」内は高等学校学習指導要領からの引用語句である）。

(1) 出題傾向

出題傾向について、時代別及び分野別の視点からそれぞれ概観すると次のようなことが言える。

昨年度と比較すると、時代別では、近現代史重視の出題傾向に変化は見られないが、今年度は、中世史からの出題が減少し、近世史からの出題が増加していることが分かる。一方、原始から 2 問出題されていること、戦後史から 3 問出題されていることは昨年度と同様であり、時期も高度経済成長期までにとどめられている。この点については、私たちの要望が反映された形となった。

分野別では、政治史からの出題が最も多く昨年度並みであるのに対し、今年度は外交史からの出題の増加、文化史からの出題の減少が顕著である。我が国の歴史を「世界の中の日本という視

点から理解させる」とした高等学校学習指導要領を色濃く反映するとともに、文化史の出題については断片的な知識を評価するものと批判されがちであることを考慮した結果と思われる。

昨年度も述べたが、時代の流れを把握させることを重視し、政治・外交史を中心に授業を展開する高等学校教育現場からすれば、政治史中心の問題構成は歓迎すべきことである。しかし同時に、「歴史の展開を」「総合的に考察させ」る視点も重視したいと考える。その点からすると、今回の試験は、出題分野のバランスについて検討の余地を残している。

(2) 「歴史の考察」を意識した出題

第1問では、高校生が書いたレポート「地方行政区画の歴史的変遷」をリード文とする「歴史の追究」に対応した大問である。地方政治にかかわる設問が中心であるが、**1**では東北地方や山陽道、**2**では西海道や東海道、**3**では沖縄県や北海道等、誤文も含めて「特定の」「地域に偏らないよう」配慮し、「地域の特性や地理的条件などかかわらせて」出題されている。

第6問は、近現代に時代は限定されているが、「世界の中の日本」を、幣原喜重郎という「歴史上の人物の果たした役割や生き方」、さらに「政治的、経済的な条件や国際環境など時代的背景とかかわらせて」問うている。

(3) 理解力・歴史的思考力を重視する姿勢

設問形式の項で述べるように、今年度の出題は、語句選択問題が減少し、文章の正誤選択問題が増加している。単なる歴史用語の暗記ではなく、理解力・歴史的思考力を積極的に評価したいとする作成部会の意思の表れと受け止めたい。

なかでも、**3**では、選択肢はいずれも「時期」「地域」「事象」の組合せにより構成されており、その正誤判断には歴史的思考力が求められる。**11**では、10世紀における地方支配の転換を取り上げている。歴史の展開の中で、転換点となった時期に着目し、その特徴の理解を問うている。**15**では、史料の引用箇所から御成敗式目と判断させ、その内容とともに、制定理由となった当時の社会情勢の理解が問われている。歴史的事象の総合的な理解を問う良問である。

30・**33**では、条約名や事件名を明らかにせず、その内容の記述から年代配列を求めている。ここでも、事象の内容理解とともに、その推移を時間軸の中でとらえる思考力を問うている。

(4) 内容の取扱い

上述したように、今年度の試験は政治史中心の問題構成であるが、その中には地域史的要素を含んだ問題も数多く見受けられる。第1問をはじめ、第2問・第4問がそれに当たると言えよう。

ところで、内容の取扱いで目立つのは設問内容の重複である。**2**及び**10**では、設問形式は異なるが、律令国家の地方支配にかかわる理解が問われている。**21**及び**24**は、ともに正文選択問題であり、正答はいずれも寛政改革期の事象である。**25**、**26**及び**31**については、設問形式は異なるが、普通選挙制度の成立にかかわる知識・理解が問われている。これらは、異なる大問若しくは異なるリード文のもとでの設問でありながら、内容が重複している。政治史中心の問題構成に異論はないが、高等学校で学習した事柄を幅広く問うという姿勢は堅持していただきたい。

3 分量・程度

設問数は従来どおり、大問が6問、小問が36問であった。60分の試験時間を考慮すると、大問、

小問の数は適切であると言える。

ただし、文章の正誤選択問題の増加及び各選択肢等の長文化傾向により、受験者が読み取るべき情報量は増加した。これらのうち、選択肢及び組合せ問題の文章等、解答にかかわる文章が2行にわたるものは、昨年度の7文に対し、今年度は32文に及んでいる。[7]・[8]のように、選択肢等のすべてが2行にわたるものもあり、受験者は文章を丁寧に読み取ることが求められた。

試験問題の程度については、昨年度と比較するとやや難化したと言える。その要因は、出題内容と設問形式それぞれに求めることができるが、ここでは出題内容について触れておく。

まず、「細かな事象や高度な事項・事柄」の確認を求める問題が散見されたことである。[5]では、三新法各法規の内容の理解を求めている。三新法については、教科書の取扱いに差があり、授業において自由民権運動の項で取り上げる際にも内容を詳細に教授することはまれである。[27]の甘粕正彦、伊藤野枝についても教科書の取扱いに差がある。「d 伊藤野枝」に関する知識ではなく、「c 与謝野晶子」の業績から判断した受験者も多数存在すると推定される。[28]では人民戦線事件、大内兵衛に関する文章の正誤判断が求められている。日中戦争勃発前後から以降は、当時の世界情勢を踏まえて日本の対外政策の推移を中心に授業を展開することが多く、受験者には難問と思われる。[30]では、パリ不戦条約の調印時期を判断する必要がある。不戦条約は、対中国強硬外交を主導する田中義一内閣下で調印された。時代の流れに主眼を置いた授業では不戦条約を大きく扱うことは少なく、その調印時期の判断に受験者は戸惑ったことであろう。

[31]では、表を読み取るために、普通選挙法成立及び世界恐慌発生^{ぼっぼつ}の正確な年代の特定が求められた。特定の年代に関する知識の有無が、解答に直結するような設問は避けていただきたい。

4 表現・形式

(1) 設問形式

昨年度の設問形式を踏まえつつ、今年度は難易度にかかわる重要な変更点が複数見受けられた。

人名や事件名等、事項を選択する設問が姿を消し、空欄補充問題も昨年度の8問から今年度は5問となるなど語句選択問題が減少する一方、文章の正誤選択問題が増加した。

その文章の正誤選択問題では、従来より見られた三つの文章の正誤判断を求める設問形式が姿を消し、すべて一昨年度から導入されている二つの文章の正誤を問う問題となった。問題数も5問から7問へと増加しており、受験者への配慮が見られた。

年代配列を問う問題は、昨年度の5問から今年度は4問へと減少したが、その選択肢に着目すると、従来の4択形式から、今年度はすべて6択形式に改められた。歴史的な展開の過程の正確な理解を問うものとして評価したい。[30]の各文章は海軍軍縮にかかわる国際条約の内容を、[33]では1920年代・30年代に日本の軍部が中国でとった行動をそれぞれ説明するものであり、各時期の流れを問うている。一方、[26]は、並べ替えるⅠ・Ⅲの各文章は事象の内容を説明したものであるが、Ⅱは事象の名称を述べたにすぎず、問題として統一性に欠けている。[10]のⅠ～Ⅲは、「律令国家が地方で行った事業」を記述したものとされるが、分野が異なり、授業でこうした整理をして扱うことはない。年代配列を問う問題として、このような出題は避けていただきたい。

今回、出題された年代配列を問う4問は、いずれも並べ替える各事項の発生した年代幅が狭い。歴史的な展開の過程の正確な理解を問うことのできる6択形式を用いた今年度、事象の変遷や時

代の流れを大きくとらえさせる年代配列問題の出題も考えられたのではないだろうか。

(2) 表 現

各選択肢等の長文化傾向は見られるが、全体的には受験者にとって読みやすいリード文や選択肢となるよう配慮されている。

11④には、「10世紀初めを最後に、全国的な班田収授は命じられなくなった。」とある。確かに、902年を最後に班田励行の史料は見られなくなるが、その事実を「命じられなくなった」と表現することには、やや違和感を覚える。

(3) 図表や写真等の扱い

今年度も、多くの図版資料や文字史料を用いて出題されている。

なかでも評価したいのは、歴史的知識を必要とする図版や表の読み取り問題が出題されたことである。23では、問屋制家内工業とマニファクチュアの相違に関する知識が必要となる。科目「日本史B」の試験という枠組みの中で資料等を用いて出題する場合、資料活用能力のみにとどまらず、歴史的知識も必要とする作問を望みたいとした昨年度の要望が反映されたものと受け止めたい。31も同様の設問形式であることは評価する。第1問に示された「古代の行政区画」の地図は、1・2を解答する際の手掛かりとして有効である。南蛮文化を問う18では、誤りの選択肢も含めて「外来の文化などとの接触や交流」を意識させる図版を用いており、高等学校学習指導要領を踏まえた出題と言える。一方、第2問に使用されている4点の図版は、受験者にとってリード文の理解を助けるという意味はあると思われるが、設問の中で生かされているとは言い難い。図版資料は、多用するだけでなく、設問との関連性を十分に考慮して用いていただきたい。

文字史料の読み取り問題は今年度も出題された。その出典に着目すると、昨年度、出題された『日本霊異記』のような古代史の初見史料からの出題を避け、8では『後漢書』東夷伝、15では式目制定の趣旨を述べた北条泰時の消息文、19では『海国兵談』という頻出史料から引用している。22は、受験者にとっては初見史料と思われるが、比較的読み取りやすい近世史料『北越雪譜』からの出題であった。史料問題の出題に当たり、出典及び引用箇所などについて十分な検討をいただいたものと理解する。

設問形式（表1）

表中の白抜き数字は各2点、それ以外は各3点

設 問 形 式	平成 21 年度		平成20年度
	問題数	問 題 番 号	問題数
事項（人名・単語）を選択する形式	0		2
文章の正誤を選択する形式	12	2、3、4、5、8、11、13、 20、21、32、34、36	7
二つ以上の 事項・文章 の組合せ	空欄を補充する形式	1、9、16、19、25	8
	文章の正誤を選択する形式	6、12、14、17、28、29、35	5
	年代配列を選択する形式	10、26、30、33	5
	関連事項の正誤を選択する形式	7、15、18、24	2
	関連事項の組合せを選択する形式	27	2
その他（史・資料の読み取り・計算等）	3	22、23、31	5
	36		36

時代別・分野別出題傾向（表2）

表中の白抜き数字は各2点、それ以外は各3点

区分	政治	外交	社会 経済 交通	文化 思想 宗教	史料 図 絵 図	人物	出題数・配点 ()内は20年度 []内は19年度
原始・古代	先土器時代						7題 19点 (9題 24点) [8題 22点]
	縄文時代						
	弥生時代			7 8			
	古墳時代						
	飛鳥～ 白鳳時代	1 2					
	奈良時代	10 9					
	前期 平安時代 中期	11					
中世	院政時代				12		4題 12点 (7題 20点) [8題 22点]
	前期 鎌倉時代 後期	14 13 15					
	南北朝時代						
	前期 室町時代 後期						
近世	織豊政権時代						10題 28点 (7題 19点) [7題 19点]
	前期 江戸時代 後期	20 24	16 17 3	18 19 21	22 23		
近代	前期 明治時代 後期	4 5 6 27					12題 32点 (10題 29点) [7題 20点]
	大正時代	25 26	32 30 29		31		
	前期 昭和時代 大戦期		33	28			
現代	戦後～占領期	34	36	35			3題 9点 (3題 8点) [6題 17点]
	高度経済成長期						
	～現代						
21年度出題数・配点	17題 46点	8題 22点	6題 17点	2題 6点	3題 9点	0題 0点	36題 100点
20年度出題数・配点	16題 47点	3題 9点	4題 10点	7題 17点	5題 14点	1題 3点	(36題 100点)
19年度出題数・配点	12題 36点	3題 8点	4題 12点	10題 26点	4題 10点	3題 8点	[36題 100点]

5 要 約

(1) 高等学校の授業への影響

時代の流れを把握させることを重視し、各時代・時期の特徴を総合的に考察させることに重きを置いた高等学校教育現場の実態にかんがみれば、政治・外交史を中心とした今年度の出題方針は歓迎すべきことであった。特に近年、政治史の比重が高まる一方で、外交史関係の問題の減少傾向が見られていたが、今年度は政治・外交両分野にわたって適正なバランスで出題されたことは高く評価できよう。

また、理解力・歴史的思考力を重視する姿勢がより積極的に見られたことも、個別的な歴史事実の暗記・理解にとどまることなく、学んだことを生徒が主体的に整理し、考察する必要性が求められているものと解する。そして、このような学びの機会を提示・設定していくことが、高等学校の授業にとって今後ますます重要な課題になるものと考えられる。

(2) 意見・提案等

政治史中心の問題構成をとることにより、時代の流れや因果関係の理解を問うたこと、ややもすれば単純な知識のみで対応できる語句選択問題を減らし、文章の正誤選択問題を増加させることで、より正確な理解力・歴史的思考力を評価しようとした姿勢、年代配列の選択肢を6択形式とし、あいまいな理解のまま正解に至ってしまう可能性を排除しようとしたことなど、今年度は例年にも増して問題作成部会の問題改善への意欲がうかがわれる出題内容であった。したがって、全般的には今年度の作問姿勢は支持できるものであり、その継続を望むものである。

しかしながら、文化史に関する出題はここまで減少させなくてもよかったのではないかという思いもある。他分野の問題ではあっても文化史的知識や理解が問われていくような出題の工夫が望まれる。このことは、昨年 の 要望事項にもあった、特定の時代・時期を総合的にとらえさせる出題が行われるためにも必要な視点であると考えられ、前述した、設問内容の重複を回避することにもつながるであろう。また、今年度も若干見られた「細かな事象や高度な事項・事柄」への深入りや、特定の年代に関する知識の有無が解答の成否に直結するような設問は、今後ぜひともなくしていくような配慮をお願いしたい。

前文にもあるとおり、今年度は3年ぶりに平均点が60点を下回った。最後に、こうした結果となった要因について、私たちなりの分析結果を述べることにしたい。

- ① 政治史中心の問題構成ではあったが、授業展開の軸としては扱うことの少ない地方政治に関する出題も多くなされており、易化の要因には直結しなかった。
- ② 若干ではあるが「細かな事象や高度な事項・事柄」の確認が要求される問題が見られた。
- ③ 語句選択問題の減少、文章の正誤選択問題の増加及び各選択肢の長文化、年代配列問題の6択形式化など、設問形式における変更点に難化要因が多かった。

もとより、これらの要因すべてを改善すべきとは私たちは考えていない。特に③に関しては、むしろ、これらの変更点に通底する基本方針には賛意を表したい。このような問題作成部会の努力には大きな敬意を払いつつも、なおかつ60点を上回る「標準的」な良問作成を強く要望するしだいである。